

特集 ケアの時代に必要な 心と方法論

Part 2

介護職よ！ 職場は辞めても 仕事は辞めるな



三好春樹 × 大田仁史 対談

大田：リハビリテーションは回復期や急性期には一生懸命やってくれるのですが、維持期あたりからそれがだんだん薄くなる。最期のところは、泥沼に足を突っ込んだみたいに誰も何もやっていない。しかし、そこが押さえられていないと、前段もやはりおかしかろうというのが基礎的なリハビリテーションに対する今の私のスタンスです。介護の現場はどうですか？

三好：私は堀田力さんには何の恨みもありませんが、「2015年の高齢者介護」に書かれている

人間のイメージが、どうも特養ホームにいた者からすると違うんですね。尊厳を大事にしろと言うけど、出てくるのは結局、介護予防とリハビリテーションなんです。そうすると、ほけたり寝たきりになったらもう人間の尊厳も何もないから、そうならないようがんばりましようと言っているようにしか聞こえない。では、私たちは人間でなくなってしまった人の後始末をしているのかという話になります。そうじゃないということが一番言いたい。

介護も最期から逃げていないか

三好：私が働いていたのは地方の特養ホームでしたから、ほとんどのお年寄りを亡くなるまでみていました。特養ホームはある意味では最後の場所です。ここを出発点として見ると、リハビリテーションというのはやはり“いいとこ取り”なのでしょう。リハビリテーションは可能性のある人だけを大事にします。維持期は慢性期に比べて何か新しい言い方のようにですが、要するに身体機能しか見ていないということですよ。

大事なのは、維持されている身体機能でどうやってその人の人生をつくりあげるかということです。ここにすごい課題があるのだけれど、維持期ということで興味が失われてしまうことになっている。

じつは私が心配しているのは、介護の世界までそういう発想になりつつあることです。老人保健施設をつくったのも、やはり右肩上がりでの可能性のある人だけリハビリをやりましょうということだし、軽い痴呆だけみましょうという発想もそうだと思います。それは介護じゃないと私は思っているのです。

特養ホームがユニットケアに取り組み始めた頃、老施協（全国老人福祉施設協議会）がどんな老人がユニットケアにふさわしいか検討しようと言い出した。おい、おい、それでは話が逆じゃないか。特養ホームまでそうってしまったら、人間が最後に行くところがなくなってしまうじゃないかという危惧が私にはあります。

大田：リハビリテーションには、この人がこの後どういう思いで生活していくのかという心の部分が完璧に置き去りにされているのです。維持期に入った時に、その人の生活をどう組み立てていくのかという手法を何もっていない。

それが、介護になると突然「尊厳」が出てきて、リハビリテーションと介護予防です。相変

わらずの右肩上がりの考え方です。じゃあ、止まってしまった人はどうするのか。法律の中でも言われていないし、解釈でも言われていません。そういうなかで、今困っている人を大事にして最期まで面倒をみてあげようじゃないのという気運は介護の現場にあるのでしょうか？

三好：特養ホームは日本的なホスピスとっていいでしょう。がん末期の痛みをコントロールして精神的に支えるという専門性ではなく、生活モデルのターミナルケアを行ってきました。ただし、これは地方だけなんです。東京都などはまず特養では死なせません。地方の、むしろ専門家や制度のそろっていないところが、本来のケアをやってきたような気がします。制度化が進んで専門家が増えてそれが介護の現場に来れば来るほど、最期から逃げて、病院に押しつけているような気がします。

私は病院を基本的に信用しています。救急車が断られるという話はあるけれど、病院は逃げないでどんな人でも引き受けて最善を尽くしています。介護はそこまではできないかもしれないけれど、やってみますというぐらいの気概がなければ、医療批判をしてはいけません。

「最期は家で」を実践するグループホームがある

大田：三好さんはいろいろな施設を見ていられています。お年寄りを最期までみるというホームは増えていますか？

三好：下村恵美子というすごいおばちゃんが始めた「宅老所よりあい」（福岡市）は、最初はデイだけだったのですが、5人のグループホームをつくりました。採算なんか合うわけじゃないです。でも、お年寄りと家族に合わせてやっていたらこのかたちになった。ここは最期までみます。さらに、最期は家に帰します。家で家族が看取り、介護職は側面からそれを支援すべき



だというのが「よりあい」の考えです。

下村さんはケアマネジャーですからターミナルのケアプランを立てて、家族会議を自分で招集します。そして、長男はこれをする、次男はこれをする、と、全員の役割を決めます。現在のケアマネのやっているケアプランはお金の配分ですが、下村さんがつくるのは本当の意味でのケアプランです。ターミナル期は、それまでに家族間にあったいろいろなことを解決し、和解していく大事な過程です。そういう役割を一人ひとりに与えることをみごとにやっています。

大田：私も「よりあい」に行ったことがあります。掘りゴタツに入れてもらったなら、「お客さん、どこから来られましたか？」と、お隣のお年寄りに聞かれましたので「伊豆からまいりました」と答えました。「ご遠方のところごろう様です」「いやいや、いいところへ来させてもらいました」と言ったら、また、「ところで、お客さんどこからおいでになりましたか？」「伊豆から」「それはご遠方のところごろう様です」(笑)。雰囲気がいいですね。楽しかった。

三好：「よりあい」は黙って座っているだけでいい。老人もそこにいることに違和感がないから落ち着いていられるのです。「お茶を飲みま

しょうか」と言って、40分くらいかけてゆっくり入れていきます。

大田：昔の家のもっている雰囲気も大きいでしょうね。

三好：畳の生活だからかなあ。施設で靴をはかされている老人がいますが、日本人は靴をはいたら外へ出ますよね。落ち着ける訳がないのです。

「制度」より「ほっとけない」

大田：私は認知症の人たちばかりのグループで体操をしたことがあるのですが、大変でした。真面目にやってくれる人もいるけれど、じっと動かない人もいるし、さわろうとするとたたく人もいます。だけど、こちらが一生懸命やっているときあってくれる人がいるんですね。その時に思ったのは、一生懸命という態度が認知症の人に対する基本的な関わり方なのではないかということです。認知症の人は、特にこちらの本心を見破る才能があるのかもしれないね。

三好：きっと、そのバラバラ感をおもしろがるくらいでないと介護はできないですね。人の本音を見抜く名人は認知症の人と赤ちゃんです。内心はイヤだけど、ニコッと笑ってごまかそうとしても絶対ダメですね。認知症の老人に接することが、こちらに余裕があるかないかのバロメーターになります。こちらがイライラしているとコミュニケーションはうまくいきません。

一方で、体調にかかわらず認知症のお年寄りとうまくつきあえる人がいます。私はその人は無意識が豊かなんだろうと思いますね。基本的に人間が好きで、困っている人がいるとほっとけないんですね。法律でこうだからとか制度がどうだとは決して言わない。「目の前のばあさんが困っているんだから」という問題の立て方をする。とても健全なのです。

目の前に困っている人がいたらなんとかして

あげようという気持ちは、誰もがもっているものだと思っています。私はそれが母性だと思うのです。母性は男も女ももっているのです。天使も悪魔もいません。余裕があれば天使で、余裕がなくなると悪魔になるのが人間です。制度にできることは、悪魔が出ないような条件をつくるということでしょう。

安心して依存できる関係をもとう

三好：介護が必要になった時、ちゃんと依存してケアを受けることができる人は、おそらく母子関係がよかった人だろうというのが私の見方です。さきほど先生が示された「情緒支援ネットワーク」の中にも“甘えることができる”という項目がありましたが、私はそれがとても大事だと思っています。リハビリテーションは、甘えてはいけない、自立しなさいという世界です。これはきついですね。

特養ホームで車いすを一生懸命漕いでいるおばあさんの車いすの後ろに“押さないでください”と張り紙がしてある（笑）。あれはいじめですよ。食堂まで30分もかけて行くのは自立とは言いません。自立とは自分のしたいことを自分で決めてやることです。手段は手伝ってあげればいいのです。自立と依存は別個のものだと考えられているけれど、じつはセットなんです。依存できるから自立できるのです。それを「自立、自立！ 訓練、くんれん、リハビリ、リハビリ！ もっとよくなってから……」と言うのは何なのでしょうね。

大田：いじめに近い。

三好：私は“未来への逃避だ”と言っています。「もっとよくなってから」と言うのは、今こを誰も引き受けないということじゃないかという気がします。自立とは、言い換えると自分の若さに依存しているということで、それはなくなるものです。若い頃から自分の若さ以外のもの



のにたくさん依存していた人は、年をとってからもそんなに困らない。だから、若いうちからなくならないものに依存する練習をしておかないといけない。なくならないものとは何か。人間関係です。依存し、依存されるという相互依存の関係です。

大田：母子関係で決まるとしたら、私たちはもうダメなのではないでしょうか？ 努力で変えられるものなのではないでしょうか？

三好：母子関係で全部が決まってしまうというのは悪いフロイト主義です。私はいつまでもどこまでも修正できると考えています。異性との恋愛関係で人間を信頼できるようになるし、子どもとの親子関係によってもできるでしょう。私は子どもとの関係で救われました。孫との関係でも修正できるでしょうし、介護関係でもできると思う。人間を信じられなかった人が介護を受けるようになって「ああ、人間を信用してもいいのかな…」と思うこと。さきほど先生が言われた「90 + 1 = 100」ですね。

アンチエイジングは錬金術

大田：若さに依存するということ言えば、ア

ンチエイジングをどう思いますか？

三好：いやあ無駄なことですよ。昔、錬金術というのがありましたが、あれと同じでしょ。老いてはいけないという文化があるからアンチエイジングなんて言うのでしょうか。その典型がアメリカ。年をとるともう人間じゃないという文化だから、そうならないように必死にアピールしてがんばる。でも、日本にはちゃんと老いの文化がありました。だから老いてもちゃんと自分とつきあえるはずですよ。みんな若さを基準にするから年をとりたいくないとか、アンチエイジングだとか言いますが、逆に考えればいいんです。年をとるということは、若さから解放されることなんですから。

大田：ああ、そうですか。私は解放されてからずいぶんになりますよ…（笑）。

三好：若さにはしんどいところがあります。私は講演で好きなことを言いますから、よく誤解されたり批判されたりします。昔は先生のところにも苦情がいったそうですね。

大田：ありました。「大田が言わせてるんじゃないか」とか。「そうじゃないですよ、三好さんが勝手に言っているんですよ」と言いましたが（笑）。

三好：先生に「若気の至りですから」ととりなしていただいたことを後で知りましたが。昔はなんとか誤解をとかなければと思って、手紙を書いたりしていましたが、最近は「ああ、この人と一生会わなければいいんだ」と考えられるようになりました（笑）。

いいケアがしたい！ どうする？

大田：今日話を聞いてくださっている人が施設に帰って、現場で一生懸命やろうとすると、「出た枕は打たれる」ということになりがちです。いい介護をしていこうと思っている介護職が定着して、仕事ができる雰囲気を保証する制度が

必要だと思っています。

三好：いいケアがしたいと思い、専門性を高めようとするのは大事なことです。専門性よりもむしろ資質をどう高めるかが大事なのだと私は考えています。みんなが本来もっているものに基づき、それをどう出していくことができるかということだと思います。だから、専門書を読むより文学作品の1つでも読んだり、いい映画の1本でも観るほうがきっと介護には役立ちます。

介護の世界も資格制度になって「有資格者しか採りません」という職場も増えてきましたが、それは「人間を見る目がないということじゃないのか」と、私などは思います。まだまだ、介護の世界はいい意味で〈資格〉より〈資質〉です。資質のある人ほど資格を取ってほしいと思います。

厚労省は思いつきで政策を立てる。それで現場が振り回される。お上の顔色をうかがうのではなく、いつも一番困っている人のニーズにどう応えていったらいいかと考えていけば、まず間違いはない。本当に大変なケースをちゃんとみてごらんください。家族間の口コミの力はすごいですよ。「いいケアをしていたらお客さんが来るという幻想から抜け出して営業活動をやれ」と、コムスの社長は内部文書で言っていたようですが、いい介護は幻想ではありません。いい介護がよい経営を連れてくるのです。

介護はマニュアル化されない最後の領域

三好：私は介護は他にはないおもしろい仕事だと思っています。先日、介護は老人の表情を出すのが仕事だという話をしたところ、聞いていた小学校の先生が「いやあ、こういう仕事があったか」と言われるのです。小学校では学年が上がるにつれ子どもの表情がなくなっていくそうです。5年生の生徒に「先生、そんなに

つっぱるなよ」と言われたとか。「こんな仕事
がしたかった。今から学校に行きます」なんて
言うから「介護職は給料が安いですよ」と言っ
たのですが、本当に行ってしまいました。昔は
子育てや教育、保育などはすごくおもしろい仕
事だったと思うけれど、今はマニュアル化され
て管理化されて、教科書どおりにやらなければ
いけない世界になってしまった。

でも、介護はまだまだ何でもできるし、なん
でもやってみようという世界です。「やってみ
て笑顔が出ればこれだよ」というのが可能な唯
一の領域じゃないかと思います。だから、給料
は安いし、仕事はきついし、上司は理解がない
と思いますが、人生バージョンで見るとこんな
におもしろい仕事はないだろうと私は思ってい
ます。

大田：心（資質）の部分に関する教育が非常
におろそかになっていると思いますね。茨城県
では、中学生がヘルパー3級を取得する運動を
行っています。実習で独居老人を訪問した子が、
家に帰って「あのおじいちゃんは今頃どうし
ているだろうか、うちは家族で食事をしてい
るのに、おじいちゃんはひとりぼっちだ…」と
心配したといいます。殺伐とした世の中です
が、一方でヘルパー研修を通して「何か自分
にできることはないかな？」と考える子ども
もいます。心の教育の必要性を今さらなが
ら痛感しています。

それにつけても、現場で苦勞している介護
職たちがたくさんいる。諦めて去っていく
人もいます。人が去っていけば、現場はさ
らに仕事がつくなくなります。たしかに給
料は安いけれど「みんな辞めるな」とい
うメッセージを送りたい。

三好：ただ、ひどいところで我慢して苦
勞するより、自分の個性を發揮できない
職場は辞めたほうがいいですよ。ただし、
職場は辞めても介護という仕事からは足
を抜かないでほしい。苦勞して人格がで
きるというのはNHKの朝の連

続ドラマの主人公だけです（笑）。性格が
ひねくれる前に自分の個性を發揮でき
る職場を見つけることです。いいケアを
して怒られるような職場はつぶれたほ
うがいいわけですから、どんな人も
辞めて、いいケアをしているところ
に移っていけばいいと思う。

自分で始めるという手もあるゾ

三好：自分たちでいいケアを始めてし
まうという方法もあります。それが一番
早い。介護保険のおかげで起業するに
はいい時代になりました。20年、30
年続いている施設を内部から変えよう
というのは難しい。設備も寮母も“30
年もの”のところはなかなか変わ
りません（笑）。そういう意味では、
新しい者が出てきて新しい状況をつ
くっていく、それで介護現場全体がよ
くなるかなという気がします。

大田：三好さんがフリーになってや
り始めた頃は、今から思うととんでも
ない世界でしたが、『新しい介護』も
できたし、さまざまなかたちで勉強
もできるようになりました。

介護は大変いい仕事なのだから、職
場は辞めても介護は辞めないで、み
んなで少しずつ知識、技術を高めな
がら、自分はひとりぼっちではない
んだ、苦勞を知っている人がいる
んだという思いでがんばりましょ
う。誰かが始めなければ事は運
びません。

私自身はもう介護を受ける側です
ので、できるだけ嫌がられない老人
になりたいものと思います。今日
は司会の役もやりました。三好さん
、遠いところありがとうございました。

（2007年7月8日生活リハビリ懇話会セミナーより）

特集「ケアの時代に必要な心と方法論」へのご感想・
ご意見をブリコ編集部までお寄せください。

ブリコ編集部

FAX：03-5911-0771

メール：brico@nanasha.co.jp